平成２７年夢アイデアの提案

臭いのないサイキンの地域づくりの夢

１．　昭和３０年代は・・・

- 戦後、昭和３０年代ことまで、「金の卵」として都市部の若者の集積が始まる前、駅前や町並みに人があふれ、地域が若く元気であった。
- 当時は、農作物栽培の肥料は、人や家畜のし尿が中心で、農業はいまでいう有機農業栽培であった。そこでは、田舎の香水といわれる臭いが豊富であった。
- 各家の便所も悪臭を発していた。

＜仮設１＞若さと地域の元気は、田舎の香水・臭いで支えられていた！

２．　サイキンまでは・・・

- 都市と地方の格差、少子高齢化、都市の便利さ・高収入に対して、地方の不便さ・生活原価が低く可処分収入が高いにもかかわらず、若者の地方定住が進まない。
- 戦後の食料増産として、化学肥料など化学物質が多量に使われるようになり、農業に臭いがなくなってきた。
- 一方、食の安全として取り組んでいる有機農業栽培は、聞こえの良さに対して臭いが周辺地域に問題を生じさせている。
- 反収（タンシュウ）に日本記録を出した農家は、決して自らそれを食しないといわれる。
- 化学肥料のやりすぎで耕作地の土が富栄養化している。
- 便所は下水道が整備されている都市部は、水洗となり、臭いが生じなくなっている。一方、中山間などでは下水道の整備は疲弊した地方財政において、整備は限りなく不可能となっている。
- したがって、臭い便所の家はそのまま使われなく、空き家・空き店舗となって行く。

＜仮設２＞臭いのしない社会は、少子高齢化、地域の活力の低下をもたらしてきた！

３．これからめざすのは・・・

- 古い家屋の便所の臭いが低コストで消せるなどすれば快適な生活が期待できる。
- 臭いのない人や家畜のし尿が、有機農業栽培に利用できれば、快適で安全・安心な農産物による若者の収入アップにつながる。
- 人口増や地球環境問題から食糧難が予想される中で、金があっても食べられない慈父代が予想される。まさに戦後の問題と酷似する。

＜仮設３＞臭いのない低廉な時委託資源を有効利用して、可処分収入象が図れる一次産業の振興によって若者が安心して生活できる時空間が必須。

＜解決手法の課題＞今年のノーベル医学生理学賞受賞の「大村智」さんもいっておられるサイキン・微生物の力で「臭い」をコントロールすればすべてが問題解決！？